Fons Sapientiae

仙台白百合女子大学図書館報 フォンス サピィエンティエ

Information
de la Bibliothéque
de l' Université SENDAI SHIRAYURI

No. 10
2011.5.1

ケソン交流事始め

国際教養学科学科長　横尾　元意

国際教養学科の「異文化体験」の研修が、フィリピンの聖パウロ大学ケソン校をホスト校として実施され、当地まで学生に同行した。この新しい交流の1ページを開いてみた感想を記して、図書館からのご依頼に自分の責任を果たしたことにしたい。

マニラ空港に降りて、深夜にも拘らず、その周辺の騒音と熱気に驚いた。とにかく、道路に車がひしめいている。少しの隙間があれば、けたたましくクラクションを鳴らしながら突込んでいく。ほとんどの車はウインカーを使わない。いやむしろ、車自体にないように見えた。しかも、そのスピードはものすごい。ケソン校のドライバーも「パイロット」と呼ばれているそうである。しかし、不思議なことに事故を一度も目撃したことがない。日本では考えられない神業である。そこでは、さびついた車からトヨタや三菱の真新しい車、そしてトラックを改造したようなきらびやかな乗り合いのバスまでが共存しながら一緒に走っている。

そこから、しきりに目にするのは止まり掛けた車に裸足で物売りする子供たちの姿だ。車の窓を拭いて何がしかの金をもらおうとする子供もいる。その辺りでは雀も小さくやせこけている。鳥までが生きるのに必死なのだ。学生たちが、スラム街に住む子供たちに給食の手伝いにでかけた。行ってみると、その場所は鉄格子に囲われていた。中に入ると、多くの子供たちに皿の上にご飯とおかずを乗せて配られていた。その中の一人の男の子は、もらったバナナと飴を左手で股に挟んでしっかり握り、右手でスプーンを取って食べようとする。けしてがつがつと食べようとはしない。気力がないのではなくて子供なりに恥ずかしいのである。彼に英語で片言話し掛けてみた。全く反応がない。おそらく彼らは英語が分からないのだ。彼らの眼差しはおびえながら何かを直視しようとしている。もし、このおびただしい貧しい人たちに教育の機会を与えたら、中国、インドなどに続く豊かな国になるのにと、素人目に見えた。

ところで、当地でわれらが忘れてはならない日本人がいる。キリシタン大名の高山右近である。迫害のなか信仰を守り、ついには幕府により追放されてマニラに渡り、不幸にも到着40日後、1615年に死んだ人物である。彼の像が孤高としてマニラの公園に立っているのが車窓から見えたとき、胸に迫るものがあった。彼を受け入れたフィリピンの人たちの温かさが、ケソン校の人たちの中に受け継がれていることを感じたからである。

彼らの中に誠意あふれる闊達さを見た。私たちは御礼の印に桜の描かれた飾り時計をプレゼントした。両校の長い穏やかな交流の時が刻まれることを願っての事である。

Contents

1　ケソン交流事始め
2　推薦図書
3　利用者の声
4　図書館からの情報
5　図書館会議・研修会等の情報
6　新着図書の紹介
7　図書館雑感⑨
8　教員著作紹介
8　図書館利用状況
8　編集後記

SERENDIPITY ～こんな本に出会いました
推薦図書

＊セレンディピティ：思わぬ掘り出し物を見つける才能。偶然貴重な発見をすること。

アンジュール ―ある犬の物語―／作：ガブリエル・バンサン　ＢＬ出版

人間発達学科
佐野 裕子

「アンジュール」のフランス語の原題は「UN JOUR, UN CHIEN」、直訳すると「ある日、一匹の犬が」となります。絵本の原点として称される本書は、愛する人に突然捨てられた孤独と絶望、そしてその修復を、作者ガブリエル・バルサン自身のデッサンで表現しています。

物語は、走行中の車から犬が放り出される描写から始まります。宙に放られた犬は、自分がどのような状況にあるか理解できずに狼狽し、走り去る車を必死に追いかけますが、車はスピードを上げ遠ざかり、やがて見えなくなります。犬はそれでも主人を追い、探し続けます。当てもなく彷徨い、歩き、佇む。孤独に耐えかねた遠吠えが、広い空と汀に響く。そして…。

本書には、文字がありません。ページに描かれているものは、作者によるデッサンのみです。濃い鉛筆の墨絵を思わせる黒白の世界は、一貫して白夜のような静寂に満ちており、悲しみと絶望を抱えて孤独を彷徨う犬の感情を驚くほどリアルに描き出し、読み手の心に訴えかけます。

震災前の社会は、高い技術や潤沢な物資に恵まれていました。しかし、生活が豊かになるにつれて、昔のような人の間にあるつながりは薄れ、自分さえ良ければいいという、利己主義的な意識を持つ人も増加の傾向にあると感じていました。しかし、震災が発生した今、日本のみならず世界の各地で、さまざまな支援の動きがあることを見聞きしています。

心を寄せあい、つながりあって生きていくことの大切さを、改めて実感することができました。人は、ひとりで生きていくことはできません。現実と本書の犬の状況とを安易に重ねられはしませんが、作者は、どんな言葉を思い、文字も色もないこの物語を描いたのでしょうか。是非、ご自身の言葉で、解釈で、一読されることをお勧めします。

作家 車谷長吉 との出会い

大学広報室 次長
佐々木 孝二

「車谷長吉」の本と出会ったのは、丸善がまだ一番町に店を構えていた頃で、ふと手にしたことがきっかけだった。

それまで私はその作家を知らなかった。

手にした本の題名は「赤目四十八瀧心中未遂」、おどろおどろしい、今の時代にそぐわないような題名に単純に惹かれた。この本は直木賞を取った。

この本の一冊と出会って以来私は、車谷長吉という作家に取り憑かれていった。その後、「塩壺の匙」、「抜髪」、「漂流物」「業柱抱き」「金輪際」と読んでいった。

車谷先生は、私小説作家だ。若い頃は、世捨て人のような放浪生活を送り、旅館の下足番や料理店の下働きのような職を転々とした。夜は、ぼろアパートの一室で尊敬するカフカを思い浮かべながら、私小説をコツコツと書いていった。

初めて先生の作品が本になったのは、47歳のとき。タイトルは「塩壺の匙」。

これが三島由紀夫賞・芸術選奨文部大臣賞のダブル受賞をし、文壇を驚かせた。

以後、己を見つめながら文学の「毒」を書き続けている。

先生の作品の魅力はすさまじい「捨て身の生」といえると思う。

ある日、新聞の片隅に車谷長吉の講演会の記事が小さく掲載されていた。

山形県東村山郡中山町の有形文化財である江戸期に建築された「柏倉九左ヱ門家」という旧家で、「わが町中山町を語り合う会」があることを知り、行くことにした。

古い茅葺きの家で暖炉を囲みながらの講演会ということで非常に興味をもった。

はじめて先生を目の当たりにして、ごく普通の坊主のおじさんという感じの、本の内容とは印象が違う感じがした。（写真中央の方）

話は、先生の独特の語り口で夜のとばりが落ちていくほど幻想的な感じが受けて私は感銘を受けた。それ以来、益々先生のファンになり、現在では追っかけのごとく時間があれば講演会にできるだけ足を運んでいる。

「20代」でやっておきたいこと ／川北 義則 著　三笠書房

総合福祉学科・
人間福祉専攻3年
島田 夏菜

私は今、「20代」という無限の可能性を秘めた世代のスタートラインに立っている。やりたいことは何でもでき、希望に満ちている。そのような20代の生き方について本書には記されている。

20代は未熟であるために、経験を積むことが重要である。「やってみるのは学ぶのに勝っている」スイスの哲学者ヒルティの言葉である。何事も恐れずに取り組むことが自分の器を大きくすることへと繋がる。経験を積む上で、失敗をすることもあるかもしれない。20代のときは、むしろどんどん失敗を重ねたほうがよく、「失敗は義務」といってもいい。成功に失敗は必要であり、大切なのは、失敗という事実にどう対処するかだ。「もうダメだ」とあきらめてしまえば、そこで失敗はムダになってしまう。あきらめないで頑張れば、先へ進めるのである。そして、問題にぶつかったときも、「自分には解決できない」と思うのではなく、あえて、「自分に解決できない問題は、絶対自分に降りかかってこない」と思うようにする。そう思えば、逃げたり戸惑ったりせずに、真正面から立ち向かう気になる。本書を読み、残りの大学生活、卒業し、社会の一員となった後にも、挑戦する気持ちや向上心を常に持ち、自分自身を成長させていきたいと思った。

人生は、予測できないものであり、先行きなんて、いつでもわからない。だからこそ面白い。そして、自分らしく生きることで、意味のある、楽しい人生となるのである。充実した20代を送るためにも、是非本書を手にとっていただきたいと思う。

本のにおいの中で過ごす私だけの時間

利用者の声・こえ・コエ……

そうだ、図書館に行こう。

健康栄養学科　鈴木 寿則

私が大学生であった頃、図書館を頻繁に利用したのは３年生になってからでした。お世辞にも、真面目とは言えなかった学生時代でしたが、ゼミのレポートや試験などでは必ず使っていた記憶があります。しかし、いま振り返ってみると単なる「図書館＝勉強場所」だけではなかったと思います。自分にとって調べたいものが、すぐそこにある！これには隠れた安心感があり、教室や自習室などで勉強するのとは、また違った取り組みができるのではないでしょうか。

昨年４月に本学に着任して、まだ数回しか利用しておりませんが、本学の図書館には使いやすさが感じられます。学生の皆さんにとって、近くて遠い存在ではなく、いつでも気軽に利用できる、毎回，必ず何かの発見や糧になるものがあります。そんな図書館の空間と書籍を、是非、十分にご活用して頂きたいと思います。ちょっとした空き時間があるのなら、どうでしょう？ 図書館に寄ってみませんか。

遠慮しながら

管理課　志子田 宗明

毎週水曜日の昼休みに行われている、バイブル・サーヴィスでの講話を依頼されるようになってから、資料探しのために図書館やカトリック研究所を時々利用しています。カトリック系の大学だけに、哲学および宗教書が充実していますね。学生時代、私の母校の図書館は自習コーナーや音響映像資料室等が整備され、蔵書管理システムや磁気センサーをいち早く導入するなど快適で魅力的な施設だったのですが、もっと上手に利用していたら少しは違った生き方をしていたかもしれません。

私自身は「遅読」の部類に属しておりまして、返却期限が常にプレッシャーとなるため、正直言って本を借りるのは少々苦手なのですが、貴重な文献や高額で個人所有は難しいような本が置かれていると、ついつい手に取ってみたくなります。環境もさることながら、やはり蔵書の充実ぶりが図書館の生命線ですよね。とはいえ、職員としては学生の皆さんの邪魔をしないよう、かなり遠慮しながら利用している感じですね。

私と図書館

国際教養学科1年　櫻場 愛梨

図書館・フォンスサピエンティエには専門書から新聞、雑誌や娯楽本など幅広いジャンルの本が置いてあり、課題や授業に関して調べものをしたい時よく利用しています。各フロアーにはソファや椅子がたくさんあり、静かで落ち着いた雰囲気があります。勉強でも読書でもゆったり過ごすことができ、私のお気に入りの空間となっています。

また、フォンスサピエンティエには書籍以外にたくさんのDVDがあり、自由に観ることができます。映画『アバター』など新作も随時入ってくるので、とても楽しみです。DVDを鑑賞するスペースは１人１台のディスプレイとヘッドフォンが設置してあり、他人を気にせず集中して観られます。私は授業の空き時間によくDVDを借りて、洋画を日本語の字幕付きで観たり、英語バージョンで観たりして、英語の勉強に役立てています。

私は今年の夏からアメリカ留学を予定しているので、現地の情報を得たり、英語の文章を書く必要が増えそうです。図書館通いの回数がさらに増えることと思います。

資料の貸出について

今回は図書館の資料の貸出について、簡単に解説します。
図書館から資料を借りる場合には、いろいろな貸出があります。

・**普通貸出**：通常の貸出で、満2週間5冊まで借りられます。
自動貸出機または、カウンターで借りることができます。

・**特別貸出**：長期休暇や学外実習の場合、始まる2〜3週間前から受付を行い、休暇や実習が終わって出校すべき日の1週間後に返却日を設定しています。
夏季・冬季・年度末の長期休暇の場合は自動貸出機で借りられます。
学外実習の場合は、実習の時期によって返却日が変わってきますのでカウンターに申し出て借りて下さい。

・**当日貸出**：その日に借りて、その日のうちに返す貸出です。
教科書や参考書といった禁帯出資料も借りることができます。
申込書に手書きとなりますので、カウンターに申し出て下さい。

・**一夜貸出**：借りた日の、次の開館日の10時までに返す貸出です。
平日は翌日の10時までとなりますが、週末に借りた場合は週明けの日の10時までの返却となります。学術雑誌や禁帯出資料(館内マーク有)を借りたい時、上手く活用して下さい。
カウンターで手続きを受けて下さい。

・**卒論貸出**：4年生のみ、卒論に使う資料を1ヶ月間借りられる貸出です。
普通貸出の5冊の他に3冊まで借りることができます。借りた資料に予約等が入っていなければ、1ヶ月後にまた更新も可能ですので、カウンターに申し出て下さい。

・**貸出できない資料**
貴重書 (Dead Sea Scrolls = 原色・原型復元死海写本 等)
禁帯出資料 (辞書などの参考書や教科書 等)
学術雑誌 (学会発行のジャーナル 等)
新刊雑誌 (雑誌の最新号)
紀要 (大学や研究所で発行している学術研究資料)
AV資料 (館内閲覧用のDVD・ビデオ 等)

※上記のうち禁帯出資料や雑誌類は、当日貸出・一夜貸出を受けることができます。

図書館からのお知らせ

●図書館ホームページのモバイル版を作りました。図書館からのお知らせや開閉館予定が見られます。
図書館のしおりにQRコードが入っておりますので、ご活用下さい。

●学生からの要望により、2階に就職関係の図書や雑誌を集めた就職コーナーを設けました。

●2011年度図書館会議・研修会の情報(主なもの)

- 2011年度東北地区大学図書館協議会合同研修会
  期　日: 未定
  場　所: 秋田地区の大学

- 2011年度日本カトリック大学連盟図書館協議会総会・実務研究会
  期　日: 未定
  場　所: 聖心女子大学

- 2011年度東北地区大学図書館協議会総会
  期　日: 9月
  場　所: 山形大学

●東日本大震災の被害と図書館

3月11日(金)の東日本大震災の際、本学図書館は開館中でしたが、利用者・職員ともにケガなく退避することができました。1978年の宮城県沖地震の教訓を活かし、書架の上部を繋いで固定しており、書架の転倒は免れました。それでも被害は大きく、図書は写真のようにすべて飛び出し、どこから手をつけてよいのかわからない状態でした。

震災後は学生の皆さんや他部署の職員に手伝っていただき、復旧作業も進んでおりましたが、4月7日(木)の地震でまた、一からやり直しになりました。授業開始までには開館できるように、再度作業を進めている状態です。

5月初めの開館となりますので、年度末貸出の期限をそれまでの4月18日(月)から5月20日(金)に延長します。返却が困難な場合等もご相談いただければ、個別に対応します。
落下時に傷んだ図書も数多くありますので、お気づきの点がございましたら図書館スタッフへお知らせ下さい。

今後も余震が来るかもしれません。図書館利用時に地震を感じたら速やかに書架を離れ、閲覧机の下等にもぐり込んで下さい。その状態で揺れが治まるまで待ってから、十分気をつけながら外に出るようにお願いします。

罹災後の状況(3月11日)

復旧後の状況

罹災後の状況(4月8日)

図書館から“NEWS”を続々発信!

新着図書の紹介

「もうすぐ絶滅するという紙の書物について」

ウンベルト・エーコ, ジャン＝クロード・カリエール 著　工藤妙子 訳　阪急コミュニケーションズ

紙の本は、電子書籍に駆逐されてしまうのか？書物の歴史が直面している大きな転機について、博覧強記の老練愛書家が縦横無人に語り合う。ジャン＝クロード・カリエールはフランスの作家、劇作家、脚本家で主な作品に「ブリキの太鼓」などがある。ウンベルト・エーコはイタリアの中世学者、記号学者、哲学者、文芸批評家、小説家で「薔薇の名前」がベストセラーとなった。本を愛し、古書や稀覯書を収集しインキュナビュラを追い求めかつ探求してきた経験から、二人はむしろ本を、たとえば車輪のような、それにまさるものをもはや想像できないほど完成された発明品だと考えている。フロッピー・カセット・CD-ROMなどの新しい記録媒体が時代遅れになるまでのスパンが短くなってきている例等を挙げて、電子化時代に絶滅を危惧される紙の媒体＝本の歴史を振り返りつつ、老練な落ち着きと豊かな見識をもって、その未来を保障する。

“二人の案内で、書物の宇宙を一望した旅路の末に、私たちが気づくのは、世に在るすべての書物一冊一冊が旅路のようなものだということだ。書物というものを、過大評価も過小評価もせず、ただ素直に愛おしみ、気負わず気楽に人生に取り入れる方法と、それによってもたらされる豊かさを、本書は手加減なしに教えてくれる。”―訳者あとがき

「くじけないで」　柴田トヨ 著　飛鳥新社

92歳から詩を書き始めた著者が、産経新聞の投稿欄「朝の詩(うた)」に応募して選者の詩人新川和江の目にとまり、高い評価を受け98歳で出版した処女詩集である。産経新聞「朝の詩」に掲載された35点と下野新聞に掲載された3作品や未発表の４作品の計42作品が収録されている。「99歳の詩人　心を救う言葉」というNHKの特別ドキュメンタリー番組が、2010年12月31日に放送され、著者とその詩が多くの人々を励ましている姿が伝えられ、大反響を呼んだ。新川和江をして“今もなお、みずみずしい感性をお持ちでいらっしゃるとは、なんと素晴しいことでしょう。専門の詩人の世界においても、それはきわめて稀なことです。”と言わしめた、栃木県在欧の百歳に近い一般詩人の詩は、読むものの心に素直に沁み入り感銘をあたえることだろう。

「シェイクスピア＆カンパニー書店の優しき日々」　ジェレミー・マーサー 著　河出書房新社

パリ、セーヌ左岸の、ただで泊まれる本屋。ジョイスの『ユリシーズ』を生み出した伝説の書店の精神を受け継ぐ二代目シェイクスピア＆カンパニーは、貧しい作家や詩人たちに食事とベッドを提供する避難所だった。ヘンリー・ミラー、アナイス・ニン、ギンズバーグらも集まったこの店は、店主のジョージ・ホイットマンの「見知らぬ人に冷たくするな、変装した天使かもしれないから」というモットーのもとに、書棚のあいだに狭苦しいベッドが点在し、ほかに行くところのない貧しい物書きや旅の若者が無料で泊まれる「流れ者ホテル」も兼ねていた。

“奇人変人ぞろいの登場人物に、興味深いエピソードの数々、よくできた話の展開、読みやすい文章といった要素があいまって、ノンフィクションでありながら小説のようにおもしろく読めるのも本書の魅力のひとつだ。若さと夢と失敗がたっぷり詰まった愛すべき青春小説のような味わいがあり、意外なハッピーエンドが快い余韻を残す。本好きにはこたえられない、世にもまれなパリの書店の物語。”―訳者あとがき

「ワタクシハ」　羽田圭介 著　講談社

人生賭けたい夢がある。でも、内定は欲しい。かつて、高校生ギタリストデビューを果たした山木太郎。しかし栄光も束の間、バンドは解散。すっかり燻り、大学三年の秋を迎えた太郎の周囲は「シューカツ」に向けて慌しく動き出していた。「まわりの就活生たちには、一発逆転で何者かに生まれ変わろうとする空気があった」。その“一発逆転システム”に魅せられ、就活戦線に身を投じる決意をする太郎。「元有名人」枠で楽々内定を勝ち取れると思っていたのだが――。就職氷河期「以下」の今に問いかける、“異常だらけ”の就職戦線を浮き彫りにする「リアル・シューカツ小説」！

作者の羽田圭介は、高校生のとき応募した「黒冷水」が第40回文藝賞を受賞して18歳でデビューを果たした。現在は20代半ばだが、みずから就活・就職・退職した経験を経て書いているだけあって、就活の状況や若者の心理をリアルにとらえた小説となっている。

「哲学する赤ちゃん」　アリソン・ゴプニック 著　亜紀書房

“子どもについての新しい科学研究や哲学的考察には、子どもの謎に新たな光をあてたものもあれば、もっと謎を深めることになってしまったものもあります。しかし、この30年の間に赤ちゃんと幼児の科学的理解には革命が起きています。かつては、赤ちゃんや幼児は非合理的、自己中心的で、道徳などとは無縁な存在だと思われていました。その思考や体験は具体的、直接的、偏狭であると。

ところが、心理学者や神経科学者は最近になって、赤ちゃんにはめざましい学習能力だけでなく、わたしたちの予想していた以上の想像力があって、人を愛することも知っているし、豊かな世界を体験していることを発見しました。幼児はある意味、大人以上に賢く、想像力に富んでいて、思いやりがあって、意識も鮮明だったのです。”―本文より。第一線の認知科学者が語る、赤ちゃんの「科学革命」。

「消えたアトランティスへの扉：水底の古代都市ヘリケの謎」　BBC 制作　丸善

今から約2500年前、大地震と津波の猛威に襲われて、海に消えたとされる幻の都市ヘリケ。人口5000人を要する古代ギリシアの主要都市で、アトランティス大陸伝説の元となったとも言われている。今まで、ヘリケはアテネから西へ150ｋｍに位置するコリント湾の海底に沈んでいるとされ、多くの考古学者たちを惹きつけてきた。

考古学者ドーラ・カツォノプールウ博士と物理学者スティーブン・ソウダ博士もヘリケに魅せられた人たちだが、古代ギリシアの書物の“ヘリケは海から2km離れたところにある”という記述から、地震による液状化現象が起きて地盤が沈下し、そこに海水が流れ込みそれによってヘリケが水の底に沈み、そこに沼ができたのではないかと推測し、今は堆積物によって埋まり消えてしまった沼の痕跡を求めて発掘を行ってきた。そしてついに、陸地からヘリケが繁栄したとされる時代の貨幣や壷が出土した。意外なことにヘリケは海底ではなく、陸にあったのである。将来この遺跡のすべてが発掘されれば、古代ギリシアの神秘がまた一つ解き明かされることであろう。

あ

なたのフォンスサピィエンティエはどんなカラー

図書館雑感⑨

本と人

健康栄養学科　宮崎正美

この原稿は、無理を言って最初の原稿を修正させてもらいました。2011年3月11日の大震災は多くの人の人生を変えました。ありふれた問いかもしれませんが、「神はなぜこのようなことを？」と私も問うています。もちろん答えはありませんしこれからも分からないでしょう。でも、最初から分かるはずが無いのだと思います。旧約聖書という人類の知恵の宝庫が示すのは、神について人間は知ることができない、ということと、にもかかわらず神は人間に恵みを与えようとしている、ということくらいでしょうか。対して、新約のなかでは次の言葉が思い起こされます。「イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう」(ヨハネによる福音書21章25節)。要するに、イエスそのものが神と同様に神秘である、という言明なのでしょう。いや、人間だって神秘です。自然そのものも神秘です。図書館の書物に書かれたことは、そのほんの一部です。そのことを勘違いすると、書物に書かれていることが現実のすべてであるかのような錯覚に陥ります。地震や津波、そういった現実に人間が無力さを感じること自体は正しい、しかし人間はそれを乗り越えずにはおれないことも知っているから苦しいのではないでしょうか。

盛岡出身の首相だった原敬（洗礼名ダヴィド）が入学していたという、そんな歴史のあるカトリック神学院にいた時のこと。教区から身辺の用にと支給された小遣を貯めて聖書註解書を購入したこともありましが、勉強熱心ではなかった私は、「現場（教会）では神学なんてまして哲学なんて何の役にたつのか」と授業をサボり、その神学院の図書館で自分の興味のおもむくまま本を読みあさったものです。神学生の中には、化学や考古学など実に様々な専門を大学や大学院で修めた者、様々な会社・企業を辞め、名誉や高収入を捨てて来た者がいました（同期生には東京大学農学部出身の者もいたが、そういえば故・相馬信夫司教は東京大学で天文学科出身だった)。そういうことを背景としていたせいか、神学生たちがほとんどを管理していた神学院図書館には、「現場」につながる感覚を与える雰囲気が、確かにありました。単なる思想でなく理念でなく現実に肉薄する（というより受肉する)「神」という、真理の源泉へと育む揺籃、まさにseminarium（苗床）であったと思います。

『薔薇の名前』という小説でも知られるように、中世の修道院の図書館は知の宝庫だが、反面で現実離れした場所という印象もあることでしょう。故郷・函館トラピスト修道院に滞在した時、閉鎖的な環境に生きている修道者たちが、実は世界の情勢をよく知って（というよりその本質をよく見極めていて）その全世界の救いのためにいのちを掛けて祈る姿に衝撃を受けました。物理的に閉鎖的な環境は、かならずしも閉鎖的な精神を産み育てるわけではない、いやむしろ「形だけの開放的環境」は、実は現実から乖離した閉鎖的な精神を生み出すことがあるというべきでしょうか。考えさせられます。

さて神学院の学生会副会長をしていた神学課程２年の終わりでそこを出て、様々な想いが込められた学舎や図書館や居室は今はかの地には無く、私のあの図書館は時々みる夢のなかに封じ込められてしまいました。現実はそういうものを越えるように私に要求します。

人を書物にたとえるなら、本学図書館や研究室の書物が書架から崩れていった様子は、大震災に対して無力な人間を表わしているともいえましょう。しかしその無力さを克服することにこそ、人間の本来の現実の姿があるのではないでしょうか。亡くなられた人々のそのいのちが、無ではないことが確認できるように今年の復活祭を祝いたいと思います。

書評:高橋泉『沖縄宮古島下地民俗誌　1974-1976　フィールドワークの記録』　横浜:まほろば書房　2011

若き研究者のフィールドワークに学ぶ

大越公平（関東学院大学）

下地（しもじ）と読む。この名を聞いて、宮古島を連想できる人はかなりの沖縄通といってよいだろう。ふるさとが沖縄であれば聞き慣れた地名であるが、初めて沖縄を訪れる人にはなじみの薄い地名である。沖縄の日本復帰が1972年であり、それ以来、最も南の県としての沖縄に出かける観光ブームが訪れ、その魅力が語り継がれて現在に至る。2度出かけただけではリピーターとは言えないくらい多くの人が親しみを持ち、訪れている。著者はもちろんリピーターであり、足繁く調査に通った研究者である。

本書に書かれてある通り、1970年代は観光ブームだけではなく、研究調査もブームといってよいほどであった。それは先行研究の積み重ねから得られた知見が大きく影響していた。同じ沖縄文化でも沖縄本島地域や八重山（石垣島、西表島、竹富島等々）地域とは違う、かなり独特な文化が宮古地域には存在するのではないだろうか、という仮説であった。その本質を明らかにしようと多くの研究者、若い大学院生が宮古の民俗文化（衣食住や方言、社会組織、宗教組織等々）を詳しく調査したのである。この時の成果が今日の沖縄研究や地域研究に大きく貢献しているといっても過言ではない。本書の研究もその一つである。タイトルにある調査期間（1974-1976）は調査時の表示であるとともに沖縄文化の研究史における大きな「時」を示している。

下地地区は観光スポットが見せる風景とは異なり、人びとが暮らしの中で培ってきた伝統文化を現在でも受け継いでいる世界である。本書はこの世界を文化人類学・民俗学の視点からまとめた成果である。真摯で丁寧な記述と丹念に仕上げた図表、それに貴重な写真が当時の様子を鮮明に描き出している。一つの地域の民俗を詳細に記述したモノグラフ（専門的研究論文）であり、基本的な民俗誌でもある。

文化人類学・民俗学に関心を持ち、沖縄に関心を持つ若い人は、フィールドワークに出かけた若い研究者（著者）を自分に置き換え、どのように調査していくべきかを考えながら読み進めてほしい。本書を読み終えるころには、自らの卒業論文を仕上げるための幾つかのヒントが得られるであろう。

著者は当時発表した論稿を体系化した本書を基にして、現在、下地社会の変容とそれに伴う文化の変容に関する研究に取り組んでいる。この研究成果にも注目したい。著者の今年度の講義や演習では、当時の調査、そして現在の調査を通して得られた興味深い社会論や文化論が多く語られるであろう。研究余滴、あるいは「報告書の余滴」を楽しみながらフィールドワークの極意を学ぶためにも著者の語りに耳を傾けてみよう。

図書館利用状況

2010年10月1日～2011年2月28日

学科	人数	入館人数	学科・専攻一人当(回)	貸出冊数(冊)	学科・専攻一人当(回)	貸出冊数(冊)	学科・専攻一人当(回)	AV 閲覧回数 (回)	学科・専攻一人当(回)	AV 閲覧人数 (人)	学科・専攻一人当(回)
人間発達学科	350	1,826	5.2	664	1.9	335	1.0	95	0.3	85	0.2
総合福祉学科	243	1,881	7.7	822	3.4	391	1.6	129	0.5	105	0.4
健康栄養学科	313	1,950	6.2	933	3.0	478	1.5	46	0.1	39	0.1
国際教養学科	296	1,499	5.1	517	1.7	273	0.9	169	0.6	157	0.5
科目等履修生	2	247	123.5	65	32.5	38	19.0	42	21.0	32	16.0
専任教職員	109	562	5.2	166	1.5	83	0.8	0	0.0	0	0.0
一般利用者 (非常勤等含)	—	102	—	117	—	51	—	0	—	0	—
計	1,313	8,067	6.1	3,284	2.5	1,649	1.3	481	0.4	418	0.3

✦ 編集後記 ✦

今私たちは、東日本大震災からの復興と言う大きな課題が、目前に立ちはだかっています。図書館も３月１１日の本震と４月７日の余震によって蔵書が散乱するなどの大きな被害を受けました。自然は今回のように地震や津波、台風等の災害として人間の生活に脅威となることもあります。しかし、私たちは、自然の恵みをたくさん受けて営みを続けていることも事実です。

古来から人間は、自然と戦ったり自然を上手に利用してきました。人間は、その記録や知恵を文字にし書籍として数多く残してきました。

本学は、東日本大震災によって新たなミッションが与えられました。地域の復興を担う人材の養成を行い、地域からの期待に応えなければなりません。これまで以上に学生の持つ力を引き出せる図書館として、リスタートできればと考えます。

図書館は、今、震災からの復興を急いでいます。図書館の再開は、大震災からの復興にとってとても重要なことです。（大坂）

3月11日(金)の東日本大震災によって、図書館も多大な被害を受け、印刷業者さんも復旧が困難な中、4月1日発行の予定だった図書館報第10号も1ヶ月遅れの5月1日に発行することができて、ほっとしております。

今回の震災で個人的にも甚大な被害を受けられた方も多くいらっしゃると思います。

仙台駅前の丸善の復旧が早く、癒しを求めて本を購入する人々が殺到したと聞いております。図書館も、学生さんの心の慰めに本を貸出できればと思って、復旧に努めてまいりましたが、4月7日(木)の余震を受け、また本が全部飛び出した状態になり、再度復旧作業を続けております。早く皆さんに貸出の提供ができればと思います。今回は、意外と知られていない、図書の貸出の種類について簡単にまとめてみました。卒論・実習貸出等や貸出延長についても、図書館1Fにあるカウンターに問い合わせて、上手に貸出を受けて下さい。（生出）

図 書 委 員：太田將勝、大坂純、アンソニー・スミス、佐藤幸夫
図書館職員：生出登、髙橋成美、須藤清美、山口普子